
ロウきゅーぶ？

カレーパン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロウきゅーぶ？

【Nコード】

N5463Z

【作者名】

カレーパン

【あらすじ】

ロリ要素&バスケ要素皆無のロウきゅーぶ！ここに爆誕。

時期は、昴が小学生の頃……未だにバスケに出会っていない頃。高校生の篁美星は、一人の少年と交流を持つ。

(前書き)

この小説は、カレーパンの逆お気に入りユーザー100名を記念した短編です。

そして、ロウきゅーぶ！でありながらロリ要素もバスケ要素もないです。お気を付けください。

では、どうぞ。

アイツと会ったのは、たぶん運命だったんだと思う。いや、そんな大層で綺麗なものじゃないな……。

何と言うか、腐れ縁の始まりだったのかも知れない。と、思う。いつもテンション高く、いつも俺の周りを引っ掻き回し……いつも、周りに気が回って、色々見ている。

そんなアイツとの出会いは――――――シャイニング・ウィザードからだった。

ロウきゅーぶ？　　始まりのシャイニング・ウィザード

この高校に入学してから、既に一年の時が経った。少し着られていた感があった制服も、今では丁度いいくらいになっている。

咲いていた桜も、この頃の温暖化に負けずに最近まで反逆していたが、力尽きて葉桜に変わってきている。

そして俺は……。

「—————付き合ってください！」

「え……………」

告白されている。今、現在、なう。

何故に？　と思う。

俺は特に容姿が言い訳ではなく、普通だと思っている。別に性格も、優しいとか頼りになるとかではなく、一般的な高校生だ。

まあ、偶に不良と喧嘩するが、ただ面倒だったからそうなっただけだし……。

本当に、分からない。けど、とりあえず答えないとだよな。

「わりい……」

「そう、ですか……」

こう言うのって、しっかり断って置いた方がいいんだよ、な……？
俯いてしまった一年の女子に、何と言葉をかけていいのか分からない。えっと……静かに離れた方が、いいんだろうか。

そう考えていたら、女の子はいきなり顔を跳ね上げた。

「……あ、あの！」

「はい！？」

情けない声が出たが、女の子は気にしていないらしくそのまま言葉
を投げかけてきた。

「彼女とか、好きな人とか居たり……するんですか？」

……ん？ 俺の感覚が間違っているのだろうか……。

確かに振られればそう言うことに気になりはするけど、もう振られたんだから関係ない気がするのだけど？

納得できないんだろうか。仕方ない。

説明というか、しつかり断るために俺は口を開く。

「いや、そういうのはいないんだけどさ。俺って—————」

俺の、気持ち。

「—————高校生に興味ないんだ」

「……………あ？」

そう、俺は同年代に興味がない。イコール、高校生に興味がないのだ。

分かってもらう為にストレートに言ったのだが、何故か女子は呆然。そして、何事か呟きだした。

「ろ……こ……」

「ん？」

独り言なのだろう。この声量では、俺には断片的にしか聞こえない。

本当にどうしたのだろうか？ いきなりで俺も混乱気味なのだけど……。とりあえず、声を—————

「~~~~~!!」

「え、おい！」

—————かける前に走って行ってしまった。

「……何だったんだ？」

本当に訳が分からない。

分からないので、放置。踵を返して後輩の女の子とは逆に歩を進める。それにしても、こう言う告白って校舎内でやるものなのだろうか。

漫画の読み過ぎやアニメの見過ぎかもしれないが、こういった物は体育館裏とか屋上とかの“外”でするものだと思っていた。だが、実際は人通りが少ないとはいえ校舎内……予想外だ。

「ん？」

考え事をしながら歩いていた俺は、何かの音で立ち止まる。

この音は、上履きで廊下の床を叩く音だ。だが、やけに騒々しい。その音が段々俺の方に近付いてくる。

気になって振り返ると——女子がスカートを激しく翻らせながら、走ってきていた。その猫を思わせる顔は、今は猛獣のような表情になっている。

……………ゑ。ナニアレ。

混乱の真っ只中にいる俺を余所に、その女子はこちらに突進してくる。どこかで見たような顔だが、思い出せない。それより今は、アレが何で怒って突っ込んでくるのか把握したいと言うか分かる人変わってくれ！

「何女の子泣かせてんだ。この変態野郎！！」

「うえ！？」

女子は、陸上部のレギュラーメンバー並みの速度のままスカートを翻らせ、洗いざらしの黒髪を靡かせ——跳んだ。

跳躍力は、かなり高い。この娘の運動神経の高さが窺い知れる。高い跳躍、その勢いのままに……今度は壁を蹴りつけて更に高く舞う。同時に、彼女の綺麗な脚がしなってコチラの顔面を膝で打ち据えようとしてくる。

こ、これは……！

変則的だが……シャイニング・ウィザード！？

片膝立ちした相手の脚などを踏み台にして仕掛ける、飛び膝蹴りの一種。開発者は武藤敬司で、相手を踏み台にして放つこれまでにない技として注目された。

発生技が多々あるが、通称してシャイニング系・シャイニング式などと呼ばれている。

最初は、ただ「変則的な膝蹴り」と見られたが、「この膝蹴りに名前を付けよう」という企画が持ち上がる。一般応募で一番多かった「シャイニング・ニー」に、当時の武藤のニックネーム「クロス・ウィザード」を合わせ「シャイニング・ウィザード」となったそう
だ。

それを、女子が、普通に立っている男子（身長170ちよつと）にくり出したのだ。

その驚異的な運動能力に啞然とするが、このシャイニング・ウィザードをもろに受ければただじゃ済まないのは理解している。――

――無意識に両腕が上がる。

左腕は顔を守る位置に動き、右手は前へ……。

同時に、左手に何かを弾いた感触。右手の握っていた拳には何か、温度36度〜37度くらいの、ぷにと柔らかいものを殴った感触が――――

「ぶふっ――――！」

「あ」

現実逃避はやめよう。

左手は、偶然にも彼女の膝を弾いて防ぎ、右拳は、見事に彼女の頬を打っていた。だがそれでは終わらない、終わる筈がない。

彼女は、どんな風に蹴りを仕掛けてきた？ ……陸上部顔負けの速度で走って。

では、空中でブレーキを掛けることは？ ……無理だ。

つまり？ ……激突。

「げぶあっ!!?」

彼女の身体が、何の踏ん張りもしていない俺の身体に激突。そのまま後ろに打っ倒れた。

「—————い、っづぁ…………!」

頭を廊下の床に打ち付け、一瞬意識が持っていかれた。後頭部強打すれば下手すりゃ死ぬぞ……。

受け身を取ろうとしたけど、彼女の身体が邪魔で頭を前に持っていけなかったので、無理矢理顔を横に向けたのだが……耳を下にしたせいで三半規管が持っていかれた。

くらくらする頭で前———というか上を見ると、女子の制服だった。たぶんあの女子の腹の辺りが顔面に覆い被さっているらしい。

「く、そっ……」

なんとか目の前の突撃娘を横に退かす。顔を見てみれば、気絶してる。ああ、頬が微妙に赤くなってるよ……。

流石にこのままって訳にもいかないよな。

「……………しゃあねえ、か」

震える足に喝を入れ、突撃娘を担ぎあげながら立ち上がる。
こういう時、中学すっかり部活やっというてよかったと思える。…
…いやな思い方だな。

担ぐ位置が微妙だったので軽く動かすと、何かが落ちた。目を向
けると、それは生徒手帳だ。中身が露わになり名前と顔写真を示す。

「……篁、美星？」

—————て、同じクラスじゃん……。

書かれたクラスは、2年9組。バッチリ、シツカリ、チャツカリ
同じクラスだった。

しかも、出席番号は俺の後ろ。うん。後ろも後ろ、真後ろだ。

「どこかで見た顔だと思ったら……」

クラスメイトだったとは……。まあ、二年になって二週間が経っ
た今でもクラスメイトの顔を覚えられない俺はどうなんだろうか。
とりあえず、生徒手帳を拾い。篁が持っていたらしい鞆に入れ、
その鞆も持って保健室へ。

たく……面倒な。

「よ、っと」

簞をゆつくりとベッドに下ろし、布団をかけてやる。

保健室には誰もおらず、外から部活動に励む生徒たちの声だけが聞こえてきた。

それにしても……。

「……ちっさ」

今頃気付いたが、簞はかなり小さい。小……いや、中学生にしか見えない。それくらい簞はちっこい。小さい。ミニマムなのだ。通りで軽いと思った。

こいつが成長期をぶん殴ってスルーしてきたのはいいとしても、流石にヤッチマッタとしか言えない。咄嗟とは言えぶん殴っちまうとは……。しかも女子。シャイニング・ウィザード叩き込みに来たとしても、この娘は女子。女の子だ。

———女の子をぶん殴った。

字面だけ見ると完全に悪人だ。だが、ここに文字を足そう。

———いきなりシャイニング・ウィザードを仕掛けてきた女子を反射的にぶん殴った。

正当防衛の言い訳は、一応立つと思う。

まあ、気絶させたのは俺なんだ。とりあえずの世話は焼こう。

深く溜め息を吐き、教室に鞆を取りに向かう。

「あーくそ。フラフラする……」

ぼやきながら保健室のドアを開ける。

未だに養護教諭はどこかに行っているらしく、部屋はほぼ無音。
聞こえてくるのは篁の寝息――

「にゃにおく、この変態がー！！」
「……………」

訂正。篁の寝言だけだ。煩すぎて、他の音が掻き消されてるんじゃないのか？　そう思うほどにハッキリとした寝言だ。初めて聞いたぞ、こんなシッカリ発音した寝言。

取ってきた鞆をその辺に置いておいて、少し探し物をする。勝手に漁ると何言われるか分からないが、まあいいだろ。居ない方が悪い。

「んゝ……」

篁が目を覚ましたみたいだ。一旦漁りを止めて、ベッドの方に向かう――が、覗いた瞬間固まる。

掛けて置いた布団は足で退かされている。それだけならいいのだが、スカートのホックが外れて僅かにずれており、更にはブレザーのボタンが全てはずれ、リボンも取れて鎖骨が……。

「はぁ……。おい、起きるならさっさと起きろ」
「ぼふっう！」

溜め息とともに、隣のベッドの枕を投げつけてやる。――顔に。

変な声を上げて、ようやく起きたようだ。

「――なにすんだ！」
「嫌いぞ……」

枕を投げ返しながら怒鳴るその姿は、元氣一杯だ。頬が少し赤いが、気になるほどじゃないようだ。

「てか、その格好で起き上がるな。少し席外すから服装整えろ」

俺はそれだけ言い残して離れ、もう一度ガサ入れ開始。

棚を漁ってようやく氷のう発見。中身を入れて、ベッドを覗く。

「おい」

「わきゅ！ あ、アンタ誰だよ！」

「えー……」

頬どころじゃなく顔真っ赤になって、なんかこっちに噛みつく勢いで詰め寄ってきた。今の「わきゅ」ってなんだ？ まさか驚いた声とかじゃないよな……。

いや、それよりもコイツ。覚えてねえのか？ さっきのこと。

「誰って。お前にいきなりシャイニング・ウィザード食らわされかけたクラスメイトだ」

「はあ？ ………………って、なんだ。新城じゃん」

少し驚く。いくらクラスメイトでも、全く接点のない俺の名前を覚えているとは意外だ。意外って言っても、コイツのこと何にも知らないんだけどな。

「下の名前なんだっけ？」

「弾だよ。新城 弾^{しんじょう だん}」

「そう、そんな名前だったね」

一人で納得するな。話を逸らすなこのヤロー。

とにかく、俺はコイツを尋問しないと収まらない。いきなりプロレス技掛けられるようなかと、コイツにした覚えがない。だから、その追及をしなくてはいけない。

「話し戻す……。で、何でお前は俺にいきなり、手加減抜きの手加減抜きを仕掛けてきた訳だよ」

俺のその質問に、暢気に「おー」とか言って、自然な動作で俺に右ストレートを―――っ！

「―――っぶね！」

「ちっ、外したか」

何とか躲したけど、コイツ……！

「何しやがる！」

「それはこっちの台詞だよ。私の部活の後輩泣かせてくれやがって、覚悟しろよ」

「はぁ？ 部活の後輩って、何のことだよ。俺は、生まれてこの方女の子泣かしたことなく……無いとは言えないが、高校に入って泣かせた覚えはねえ！」

事実、俺は女子とは最低限の会話しかしてなかったんだ。流石に幼稚園とか小学生の時には、泣かせちゃったことはあるが、小学生の高学年にもなればそんなことなくなったし……ましてや中学でなんて。

「泣かせたじゃなかよ！ 今、さっき！」
「へ？」

今、さつき？

……。……。……。……。……。あ。脳内検索で、今さつき話していた女子を検索したところ、二人だけ該当者発見。その内の一人、篁を除去。

「……あの子。泣いてたのか……」

「そうだよ！　——って、知らなかったのか？」

「ああ。全く。いきなり走って行っちゃったから、顔とか見えなかった……」

泣かせた……。あの会話のどこに泣かせる部分があったのか分からないが、泣かせたのは事実なんだろう。

けど、何でだ？　ふったって言う理由なら、ふった後直ぐだろうし。そうなる、その後の、高校生に興味がないって所だろうか？　そのことを篁に聞いてみたら、ドン引かれた。

……俺が一体何をした。

「お前、それはねえよ。てかお前ロリコンだったのか」

そうか、なんか知らん内に言っちゃいけないことを言ってしまったらしい。何でかは知らないが、言っちゃいけないんだったら、そう覚えておけばいいだろう……。……って——

「————誰がロリコンじゃあ！」

「え、違うの？　今の話聞く限りじゃあそう聞こえたんだけど」

「アホっ、ちゃうわ！」

「なんで関西弁なのよ」

「知るか！」

聞き流すところだった。誰がロリコンだよ。ただ高校生に興味がないだけだと言うのに、俺の守備範囲は大学生くらいのお姉さん系だと言うのに……。

「てか、俺はロリコンに見える顔してるのか……」

「そうなんじゃないの？」

にやふふ。などと気味悪く笑いながら、俺の呟きに篁が答える。

高校生に興味ないと言ってロリコンに見られる顔って、一体どんなだよ。流石にそれは酷くねえか。

項垂れていると、肩をポンポンと叩かれる。言うまでもなく篁だ。顔を上げれば、やはり笑っていた。

「なんだよ」

「まーまー。私に任せなよ。言ったでしょ、部活の後輩だって。私から誤解解いておいてやるから」

「……………」

その申し出は有り難いんだけど、何故か素直に頼めない。

何となく、嫌な予感がしたからだ。

「その代わり、貸し一つな」

「うわ。やっぱかよ……」

そんなことだろうと思ったよ。

けど、ここは頼むしかないんだろうな。

はあ……。告白されて少し舞い上がっていた気持ちだが、今ではマリアナ海溝並みに沈んでいる。

何と言うか、色々理不尽な気がする。

結局あの娘の誤解は篁に頼む……と言うか、オネガイした。

これが、篁 美星——ビューティフルスターとの、衝撃的かつエキセントリックな出会いだった。

「オイコラ、コレハイッタイドウイウコトダ」

「どうって、勉強会でしょ」

「そんなこたあ分かってんだよ。でも、なんでお前の家なのか聞いてるんだが……！」

四月の中頃にあったシャイニング・ウィザード事件（命名・俺）から既に一ヶ月半。

吉田——あの後輩の女子——の誤解は、篁が解いてくれたらしい。少しして吉田の方から謝りにきた。何で謝られたのかは分からないが、とりあえず一件落着だ。

—————篁に貸し一つだがな。

それからアイツとはよく話す様になり、試験期間に入った訳だけど……。

未だに貸しを残したままで不安だ。これが普通のやつならいざ知らず、出会いがプロレス技の簗 美星だ。何をされるのかと、びくびく怯えながら日々を送らされている。

そんなある日だ。

簗から勉強会のお誘い。普段の俺なら飛びつくが、コイツにだけは絶対に飛びつきたくない。逆に振り払う勢いで全力で逃げる。故に――――その話をされた瞬間、一度逃げた。

逃げようとした瞬間に、襟掴まれて意識落とすところだったがな。……なんだよ、あの握力と腕力は。

そして、今は簗の家に引き摺られてきた。

「何所でもいいじゃん。それに、正確には私ん家じゃないしね」
「……………は？」

訳のわからん言葉を疑問に思い表札を見てみたところ、“長谷川”と簗の文字とは何の関係もない三文字が――――

「他人んちじゃねえか！　せめて一文字にしやがれ！　ついでにアレって何て読むんだっけ！？」

言いたいことをとりあえず吐き出し、肩で息をする。

こいつは、お前の家じゃねえじゃねえか……。しかも、長谷川（何て読むかど忘れ）なんて名字のやつ、クラスには居なかったはずだ……たぶん。

「一応他人ん家じゃないよ、おねーちゃん家。一文字にしろって、知らないよ。アレは長谷川はせがわだよ」

「ああ……」

はせがわ……。ああ、そう言えばそんな読みだったな。

てか、コイツの姉貴？ 性格とか似てるのか？ 出会い頭にスコ
ーピオライジング仕掛けて来るとか、ないよな……。名字違うって
ことは、結婚してるのか？

色々疑問が沸き上がってくるが、簗がさつさと玄関を開けてい
たので、俺も急いで着いていく。

「こんにちは。長谷川 七夕って言います」

「あ、はい。新城 弾、です……」

若い……。小学生の子供が居るって聞いたけど、容姿だけなら普
通に高校、大学生で通る気がする。

けれど、どこか落ち着いた雰囲気、大人なんだと分かる。

「それにしても……」

「はい？」

「ん、なに？ おねーちゃん」

七夕さんは、少し簗を見詰めると、笑って首を振って台所に向か
っていった。

少し気になったが、とりあえず簗に着いて行きリビングの座卓へ
とつき、ソファーに背を預ける。何故か変に疲れた。

「それじゃあ、さつさとやっちゃおう。苦手な科目って何？」

「全部——————ッゴパ！」

「全部って言ったら蹴るから」

「この……っ、もう蹴られてるっつの！」

座卓の下から、ソックスに包まれた箸の足が俺の腹に突き刺さった。その勢いで額を座卓に思い切りぶつけたが、直ぐに顔を上げて怒鳴る。

なんつー蹴りだ、一瞬息が出来なくなったぞ。シッカリした体勢じゃなかったにも関わらずこの威力って、もし真面に受けたら気絶するんじゃないか？

「にやはは、私が言う前に言うからだよ」

「理不尽な……」

「で、何が一番苦手な訳？」

ここは大人しく従おう。コイツは手加減で物を知らない。

まあ、全部苦手だとは言ったが、基本的に全部平均くらいの点数は取れているのだ。だが、その中で唯一赤点常連なのが――

「……英語だ」

「へー、そうなのか」

そう言えば、コイツって滅茶苦茶英語得意だったはずだ。これは、今度の英語は赤点取らずに済むかもしれない――

「……………」

「……………」

「お前、ホントにダメダメだな」

L

のだ。

トツだし。

ペラペラと何語か分からない言語喋りやがって（英語です）

「くそ、仕方ねえだろ。去年までは……」

をかけ、打ち込んでいた。

更に遠くへ飛ぶ為に――毎日……。

「の？　いつもあんなに――」

ぶん殴っちまって、それで退部」

要はねえんだ。

軽くなっているのだろうか。

「ザマアねえよ。一年でインハイに出て粹がって、調子付いて……
相手下に見たこと言って、先輩と喧嘩だ。しかも、先に手を出した
のは、逆ギレした俺の方」

「……………」

何も言わずに居てくれるのは、有り難いのだろうか。それとも俺
は、何かを言ってほしかったのだろうか。

俺には、分からない。

「それだけじゃない。まだ、捨てきれてない。未だに筋トレや、幅
跳びの練習してさ、未練たらしいったらねえよ」

転校してやろうとも考えない俺が、より遠く跳ぶ為に未だに努力
をしている。

いや、努力なんてものじゃない。醜く大空へと羽ばたこうとして
いる、ニワトリに近い。もう飛べもしないのに足掻いている。

「……………アンタ、バカでしょ」

「は？」

一言で、篁は、たったの一言で切り捨てた。

特に何も感じないが、気にはなる。と言うよりも、バカ呼ばわり
されて軽く苛立つ。

「んだよ」

「だってそうでしょ。捨てきれないってことは、それだけ大切なも
んだからでしょ？ 未練があるってことは、それだけ跳ぶことが好
きだったんでしょ？ なら、それでいいんじゃないの」

まるで宥めるように、篁にしては優しすぎる声音で紡がれたその

言葉に、俺は何も言わなかった。言えなかった。

別に、今コイツが言ったことを肯定する訳じゃない。でも、否定もできなかった。

結局その後は、軽く勉強をして帰った。

夕飯を食べていくかと聞かれたが、あまりそういう気分じゃなかったから断り、言葉少なに帰宅した。

試験が終わり、ギリギリ赤点を取らなかったのは、篋が色々よ教えてくれたからだろう。しかし、それを素直に言うとは確実に貸しが増える。だから適当に礼を言っ——

「でさあ。赤点回避できたわけだけど、私になんかないわけ？」

————黙っていても貸しは増えるらしい。

不気味な笑いと共に、篋が背後から肩に腕を回してくる。身長差があるため少しぶら下がるような格好になっているが、そんなこと気にしていないようで、そのまま首を絞めに……。

「ちょ、ギブギブ！」

「早えよ……。この軟弱者が！」

「グエツ、マジで勘弁してくれ、マジでキツイ……！」

首に腕がギリギリと絞められていく。キツイ、相変わらずどんな腕力だよコイツ……!

しかも、なんか当たると思ったら、コイツの肋骨(断じて胸ではない)のようだ——って、なんだか絞め付けがキツクなった気がするんだが!?

俺は急いで回されている腕をタップするが、全く緩まる気配がない。絞め落とす気かコイツ。

「こ、んのっ!!」

「お、おお?」

体を振り回し、何とか脱出。面と向かって対峙する。

“あの話”をしてから、眼を合わせることも出来なかったが、今はそうしないとノックアウトされかねない。

それにしても、コイツはいつもいつも何か技をかけてきやがって。

「……で、何の用だ?」

「何の用だ、とは随分な言いようじゃないか。赤点回避に貢献してあげたんだぞ? 貸しでいいだろ」

「……ソーデスネ」

くそ……。貸しになっていやがるよコンチクショー。

「じゃあ、貸し二つってことで、一つ分くらい返しなよ」

「—————はあ?」

この後、俺は甘味処にて筐に財布を軽くさせられた。

……女子って、何であんなに甘いものを食べられるんだよ。見るだけで胸焼けがしそうだったな……。

何とか無事に夏休みを迎えることが出来た俺なのだが、全く休めていない気がする。

篋に必要に連れ出され、アッチやコッチへ引っ張り回されている。しかも、その過程で俺の両親とも対面。初めて家に来た息子の女友達を、見事に勘違いしてくれやがったうちのお袋さんの説得には、物凄く労力を使った。

そんな、いつものトレーニングか篋に連れ回されるかの日々を送っていた俺なのだが、物凄く嫌なことに気付いた。

「——————宿題やってねえ」

「アホ」

俺の哀愁に塗れた呟きを、この傍若無人大魔王の篋は一言、二文字で叩き斬りやがった。

コイツに頼むとまた貸しが一つ増えるんだろうが、頼めるのはコイツしかいないんだよな。……友達が欲しいとかでは断じてない。

「おまつ………！ ……………頼む」

「じゃあ、貸し一つ」

「げっ、やっぱかよ」

予想していたが、実際に予想通りになっても全く嬉しくない。

こんなことで喜べるやつは、きっとMの才能があるだろう。俺任命で烙印を押してやる。

軽くげんなりしていると、篁は更に言ってきた。

「じゃあ、昼飯はここで食ってけ」

「え……いいよ」

俺のこれは、遠慮とかではない。と言うか、コイツと一緒に居ると「遠慮って何？」と言う感覚に陥ることが間々ある。

実際には、何となく居辛いのだ。

あの試験勉強の日から、何となく距離を取っている。いや、今確かに宿題見せて貰おうとしているが、そう言うのではなく……何と言っているか分からないんだが、心の距離と言うのだろうか。線を一つ引いて、俺は下がっている。

何でかは、大体察しはついている。……“あの話”だ。

「却下。貸しがあんだから大人しく食ってけ」
「は？」

訳の分からないことをのたまってきた。

いや、普通逆だろ。飯食わせてもらうんだから、貸し作ることだろ。なのに、なんで……。

「いいなー？」

「……分かったよ」

「にゃふふ、よろしい。じゃあ、早速やるか……って言っても写すだけだろ？」

「だな……」

もう、コイツについて悩むのはやめよう。馬鹿らしくなる。きっと今回も、“何となく”とかだろ。

「てかよお。長谷川家はいつからお前の家になったんだ？」
「にやはは。いーじゃんいーじゃん、気にすんなよ」

やけに豪勢な昼飯を食い終わり一息吐き、再び宿題に取り掛かって少しして、長谷川家に来客を知らせるインターホンが鳴った。

「ん？ 誰か来たのか」

「あー、たぶん葵だろうね。今日来るとか言ってた筈だし」
「そうか」

荻山 葵ちゃん。小三の七夕さんの息子で篁の甥っ子、昴の幼馴染だ。

篁と居ると、必然的に長谷川家の人たちと知り合い、その仲良い人たちとも知り合う。葵ちゃんもその一人。

特に仲が良いのは昴だ。同じ篁 美星の災害に悩む同士として、いつの間にか仲良くなっていた。苦勞人という言葉では生温い俺等は、仲間の登場に歓喜したものだ……。

「あの二人、このまま結婚まで一直線みたいに仲良いよな」
「そうか？ 昴は恋とか全く無視で、そのまま何か打ち込めるものやってそうだけだね」

俺の言葉に、にやふふと笑いながらそんなことを言っている。
たく、そんな訳あるか。高校男子の恋心嘗めるなよ？ きっと彼女作りに奔走してるはずだ。

「……………」

今思ったら、俺って全くそう言うの考えていないな。

春に告白されたけど、タイプじゃないの断って、それから全くそういう話はない。女友達の篋を、全くそういう風に見ないし……。さっきの俺の考え、違ってたか？

「どしたの？」

「いや、何でもねえや。ほれほれ、英語を見せよ」

「見せてやってんのに、なんでそんな偉そうなんだよ」

その言葉と同時に、英語の宿題が顔面に直撃した。くそ、冗談の通じない奴め。

結局夕飯までご馳走になってしまった。美味しかったけど、やはりなんとも居辛かった。

ああいう団欒は好きな方なのだが、そこに踏み込むべきじゃないと思っている。

「じゃあな。ご飯、美味しかったです……って、七夕さんに一字一句間違えずに言っというてくれ」

「おう、分かった。分かったけどさ————」
「ん？」

靴を履いていて、背を向けていた俺の背に、言葉が叩き付けられた。

「—————遠慮すんなよ。お前がどんなでも、私とアンタ、今は“友達”なんだからさ」
「……え、あ？」

困惑して振り返ると、既に簗はリビングに戻る寸前で、目に映ったのはアイツの後を追いかける黒い髪だけだった。

「……なにやってんだか」

“友達”の感覚が、今の俺には分からないが……。俺はこれで、いってことでいいのだろうか？
考えても分からない。

「けど……」

たぶん、少し気が晴れた気がした。

夏の猛暑が過ぎ去り、残暑も過ぎ去る寸前に行われた体育祭や、その後に行われた文化祭は、いつも通り簗に引き摺り回されただけだとは思えない。

何だろう。春の頃から、価値観が微妙に変わっていた。
簗といることが、煩わしくない。前はもっと、他人と距離を取っていたのに……。距離を取っていたせいで友人が出来なかった訳だが、そこは別に問題ではない。

ただ単純に、俺が『友人』との距離を掴み忘れているというだけだ。

「なあ、結局友人ってどこまでが許されるんだと思う？」

「何でそんなこと俺に言うんだよ……」

「……相談できる相手が居ないんだ」

クリスマスと新年の前に立ちあぐさるにつつき試験^{テスト}の為に、懲りずにまた篋に勉強を教えて貰いに（長谷川家へ）来たのだが、何故か篋は現在シャワーを浴びている。

その為俺の話し相手は、この家の家主——長谷川 銀河かこの人の息子にして俺の同士昂になり、現在どこぞの大学で教授として仕事をしている銀河さんは居ないので、強制的に学校から帰宅したばかりの昂になる。七夕さんは、何でか俺は話しにくい。それに、今は買い物に行ってるしな。

そして、今俺は同士昂に、俺の切実な悩みを打ち明けた。

即ち、友人ってどこまでの線引きをして接すればいいんだ？　と
言うもの。

ここ数年友人が居なかった俺は、完全に友人との接し方を忘れていた。いや、遅すぎるにも程があるのだが、仕方ないと思う。相談する相手が相手だったために、腹を括るのに時間が掛かったんだ。だって、小学生に相談する高校生ってどうよ……？

「で、だ。どうなんだ？ 友達って、どうやって線を引けばいい」
「……………」

何でか、変な物見るような視線を向けられた。え、何だこれ…………。

「いや、だって———そんなこと、普通考えないからさ…………。う
ーん、何というか…………一々考える必要がないのが、友達じゃないの
か？」

「……………」

…………そう言われても、俺には全く分からない。

ほんの数年、たったそれだけで“友人”との接し方を忘れた俺に
は、理解が追いつかない。だって、考えないで接したら、接した結
果が今の“友人”のいない状況なんだから…………。

だけど、それでいいんだと思う俺も居る。

どれだけ線を引いても、アノ馬鹿はその線を乗り越えて——と言
うか、その線を跳び越えて…………いや、踏み消して来やがる。それ
で、今まだアイツとは普通に接されている。

言葉にすれば、これが本当の『友達』ってことでいいのか？

「ん…………。サンキュ、何となく分かったかもしれない」

「そうなのか？」

「そうなのだ」

つまり、このままでいいって事だろう。アイツとは、今まで通り
のこのよく分からない友人関係でいいってことだ。

「……………」

でも、なんだろう。何かが胸につつかえる。

その正体不明の感覚を今は無視して、軽く息を吐く。とりあえず、簗とは今まで通りアイツの勝手に振り回されてやろう。それが、俺とアイツの線引きだろう……全然引けてないけどな。

「……………おい、さっさと勉強するぞー!」

「ん、りょーかい。……じゃ、いっちゃやりますか」

昴と座っていたソファーから立ち上がり、勉強に励む為に簗の居る方に向かう。

まあ、悪くはないよな……。

走る、走る、走る。全力で走る。

目標が近づいてきたのなら歩幅を狭く、しかし速度はその状態を維持したまま……………跳ぶ……!

踏み切りは、利き足の右で。力一杯、叩き付けるように……。

見据えるのは、着地点より更に前へ。尚前へと、尚上へと跳ぶ為に、ほんのコンマの飛翔中に背を逸らす様に体を前に押し出す。

「……………っ……!」

着地。柔らかな平坦な砂場、足が侵した。

体はそのまま前へと倒れ込み、何とか手で顔面を砂に埋めることを免れる。

立ち上がって後ろを見て記録を確認するが……………変わってない

……。一年の時から、少ししか伸びていない。

ダメなんだ。これじゃあ、“今のアイツ”には勝てない。

「……………くそっ」

これでは、絶対に負けたくないのに……。

今度はもう少し前に向かって跳ぼう。そうじゃないと、勝てないんだ……………！

……………この数日前……。

「……………はあ？」

「だからー。アンタさ、もっかい陸上部入らないの？」

三学期も始まり、もう直ぐ俺等も三年になるんだと実感してきた頃だ。

いつも通り、昼休みは篁と一緒に飯を食っていたら、藪から棒——
—と言うか棍棒なことを言ってきた。

「……………何でだよ」

「いや、なんとなく」

「なんだそりゃ……」

コイツが訳分からんこと言うのはよくあることだが、今回ののはも
っと分らん。

「アンタ、まだ走り幅跳びに未練あるんでしょ？　だったらさー…」

「戻らねえよ」

「どうしてさ」

「どうして、ね……」

こればかりはどうしようもない。俺は、あの場所に戻ることはできない。陸上部の皆が、俺を許さないだろう。

「確かに俺は、跳ぶことが好きだ。愛してると言ってもいい。でも、部活で跳ぼうと思うほどじゃない。というか、ただ跳べればいいだけだからな。俺は」

「ふーん……。アンタがそう言うならいいけどな」

それだけ言って、箸は弁当を片付けて戻っていった。俺は、その背中を少しでも見詰めて、直ぐに逸らした。

はあ……。やっぱりまだ未練たらたらだな……。チクショー。

その放課後、特にすることも思いつかないので直ぐに帰ろうと廊下を歩いていたら、箸の姿が曲がり角に見えた。

「おー、どうし——」

「——付き合ってくれないか？」

「——たあ……？」

……一体どういう状況なのでしょう？
いや、まあ何となく分かってはいるけどさ。なんで篁が告白されている場に遭遇しなきゃいけないんだよ。

しかも、相手って……“アイツ”じゃん。

「ん？ お、よー新城！」

「い！？」

何故そこで丁度俺に気付きやがるこのヤロー！ あ、相手の方も気づいちまったじゃねえか。どうしてくれやがる……。

いや、確かに面倒だが、さっきの相手の言葉も気になる。

聞き間違えてなければ、付き合ってくれと言っていたのだ。あの

篁美星に……“俺の知り合いの人物”は。

それは何か………イラ、つく？

「お前か、新城……」

「……ああ、俺だよ———高城」

篁に告白した相手——高城が、コチラを睨むように見てくる。

陸上部の走り幅跳び選手。今年のインターハイに出て、いい所までいった猛者だ。勿論、こいつとは知り合いだ。同じ部活で同じ競技だった訳だからな……。

そいつが、俺を睨みながら口を開く。

「お前、また篁さんの周りウロチョロしてるのか」

「………はあ？」

篁……さん？

しかも、俺がコイツの周りウロチョロとか、どこの国の冗談だよ。唯一分かるのは、アメリカンじゃないと言う事だ。

「アホか……。ウロチョロしてんの——てか、俺が引き摺り回されてんだよ」

「それはアレか。お前は篁さんに好かれていて、自慢してんのか！？」

「何でそうなんだよ……」

コイツの考えが分からん。

篁に引き摺られていくことが、何所に自慢する場所があると言うのか……。気分はドナドナだぞ。それともアレか、高城はそう言うヤツだったと言う事か？

「ま、いいや。じゃ、俺はこれで」

これ以上は面倒そうなので、俺はこの場から離脱することにした。もし、篁が高城の告白を受けるのなら、それはそれで別にどうでもいい。俺に絡むことも少なくなつて、楽になるってもんだ。

「……………」

そう、楽に……なる。

「あ、タンマ」

「……………？ぐぎゃっ！」

踵を返してこの場を離れようとした俺の襟を、篁が掴んで止めた。そのせいで、俺の首に食い込み変な声を出しちまった。

「げほっ、ごほっ……！ 何しやがる！！」

「なあ高城。ちょっと提案がある」

「な、なんだ？」

盛大に堰きこみながら抗議をしたが、そんなものどどこ吹く風と、少し気後れしている高城にそんなことを言っていた。

提案って、それと俺が強制的に引き止められたのは関係あるんだろうな……。

「にゃふふ。簡単だよ。私が欲しけりゃ、コイツに勝ってからしな」

そう言って、襟を掴まれたままの俺を高城の目の前に突き出した………っ………

「「え？」」

高城とかぶって、疑問を声に出す。

何故そうなる……俺って全く、関係ないよな。この話……。

「待て待て待て！ 何故そうなりやがるこのバカ女！」

「誰がバカだ。この大バカ野郎。で、勝負内容はそっちで決めてくれて構わないから、私を賭けて戦ってくれ」

「え、あ、構わ……ない」

誰が大バカだコラ。それと、勝手に俺を巻き込むな。後、自分で私を賭けて戦えとか、アホかコイツは。

「よし、決定。じゃ、またな」

「おぶっ！？ てめ……待て！ 何で襟掴んだままなんだ、離せ。」

いや、離してください！ し、死ぬ……！」

勝手に決めて、俺の襟を掴んだまま歩きだす。篁は、体格に似合わずあり得ない腕力で、俺を引き摺って行く。それと並行して、俺の首は締まって息が出来なくなっていく。これをこのままにすると、死ぬ……。

「……………」

「ん？ ああ、ワリイ」

無言で篁の手をタップする。怒りで声を出さなかったのではなく、既に出せない程に苦しかったから、だ。後少し離すのが遅かったら、意識堕ちてただろう。

軽い調子で篁は手を襟から離し、コチラに向いた。

俺は、漸く酸素を吸い。堰き込む。

「げほっ、げほっ！ テメエ……一体何なんだよ」

「にやはは。すまんすまん」

俺が言いたいことが分かったようで、片手を拝み手にして、又もや軽い調子で謝ってきた。

言いたかったのは、何で俺を巻き込んだのか。それと、今の行動全てだ。

それに何より、いつものコイツだったら。嫌ならあの場で断っていただろうし、良いなら了承していた筈だ。なのに、態々俺を舞台に引きずり出して、こんな面倒なことをさせるなんて……。

「たく……。で、一体何がしたいんだよ」

「いやー、なんだ……。お前、この頃誰か相手に思いつきりトんでないだろ？ だからさ。その場所やろうと思ってな。相手、お前と

同じ競技の奴なんだろう？ だったら——ってな」

「だからって……何で、お前を賭けることになってんだよ」

「話の流れ上」

「つまり、思いつきかよ」

コイツ、どこまで……。

もう、面倒だしいいや。考えるのは止そう。勝負はもう決まっている。

アイツは、必ず走り幅跳びで勝負を仕掛けてくる筈だ。なら、後は————勝てばいい。

「はあ……面倒だけど、仕方ねえ。やってやるよ。お前の為に、っ
てか？」

「にゃ、にゃはは。似合わねえ、よ！」

「ぎゃふっ！」

背中を思いっきり、平手で打っ叩かれた。何しやがる。折角こっ
ちがやる気が出て来たって言うのによ。

いや、確かに最後の一言は要らなかっただろうが、実際にコイツ
の為にやらされる訳だから合ってると思うんだけど……。

てか、また変な声出しちまったじゃねえか。

「げふっ、げふ！ 似合う似合わねえじゃなくて、実際そう言う勝
負なんだろう？」

「まあ、そうなんだけどさ……」

「ああ？」

コイツが言いよどむなんて珍しいこともあるもんだ。と言うか、
さっきの篁も変だったな。

けど、今俺が考えるべきなのは、たぶん違う。

アイツに——高城に勝つことを考えればいいんだ。面倒だけど、仕様がなない。

「とにかく、やるにはやるさ」

「そーこなくっちゃな！」

そう言っつて、篁は笑う。

さあ、頑張らないとだよな。

「……………」

結局、勝負内容は走り幅跳びになった。

当たり前だ。高城が、俺との勝負に選ぶのはそれしか存在しない。別に、俺は練習をサボっていない。毎日、跳んでいる。でも———

「記録が、伸びてない……」

一年前から、殆んど伸びていない。

立ち上がって後ろを見て記録を確認するが———変わってない……。一年の時から、少ししか伸びていない。

ダメなんだ。これじゃあ、今の高城には勝てない。

「…………くそっ」

これでは、絶対に負けたくないのに……。
今度はもう少し前に向かって跳ぼう。そうじゃないと、勝てないんだ——！！

「おーい、やってるか？」
「……ん？」

俺がいつも使っている練習場、そこについては篁に教えておいていた。
だから、別にこいつが来るのは可笑しなことじゃない。でも、満面の笑顔なのに、眼が全く笑ってないのが無性に恐怖を煽る。

「ど、どうしたんだよ」
「どうしたんだよ。……じゃ、ねえよ。二回くらい見てたけど、なんだよアレ」
「……見てたのかよ」

笑顔から、完全にこちらを睨む顔になった篁は、かなりの勢いで詰め寄ってきた。

しかも、見るからに怒気が立ち上っている。今のコイツなら、サバンナでチーターやライオンをも畏怖させることができるだろう。

「言え。何だよ、アレは」
「……たぶん、スランプだ。しかも、一年位の大スランプ……。だから、記録が全然伸びてねえんだ」

吐き出すようにそう言った俺の言葉を、

「—————そこじゃねえよ」

しかし、その俺の吐露を、篁はバツサリ切り捨てる。

その眼は、完全にキレている。

キレている理由がそれじゃないとしたら、他には分からない。

コイツは、俺の今の記録を見て、高城との勝負に不安が出たからじゃないのか？ それ以外に、俺はコイツを怒らせるようなことはしてない……筈なんだが。

「わかんねえか？」

「……………」

分かんねえ。

「……分かんねえよ。勝負に勝ちたいのは、当たり前だろ。なににより、俺が負けちまえば、お前は——」

そうじゃないと、お前は、高城と——

「————この、ドアホ——」

スパン。と、小気味のいい音が響き。一瞬遅れて、俺の左頬に痛みが沁みる。

強制的に少し横に向かされた顔を正面に戻せば、未だにこちらを睨む篁が、右手の張り手を振り抜いた状態で止まっていた。

「————」

絶句する。

いきなりの攻撃に呆然としたのもそうだけど、コイツが——篁美

星がビンタなんてことをしてきたことに驚いたんだ。

篁の攻撃コマンドには、殴り・蹴り・関節技・投げ技の四つだ。しかも、どれも威力が半端ない。某ゲームのメ○ルス○イムを瞬殺できる程だろう。その篁が、ビンタ……。

「私はな、お前にそんな事の為に勝負させたかったんじゃない！ お前が、前みたいに楽しく跳んでくれば、勝負のことなんて関係ねえんだよ！ だから————っ！」

篁は、コチラを睨んだまま怒鳴り散らすと、直ぐに背を向けて走っていつてしまった。

「—————」

俺は、やはり無言で棒立ちのまま、その背を見送るしか出来なかった。

どんな顔をしていいのか、分からない。

ただ、思い出しはした。

「はは—————」

乾いた笑いが漏れる。

ああ、思い出したよ。俺が、どうして幅跳びで跳びだしたのか……。

別に、誰かに勝ちたかった訳じゃない。確かに、負けることは悔しい。でも、それでも俺は、楽しければ良かったんだ。

跳ぶことが楽しくて、ただ跳び続けた。

その筈なのにな……。

「はあ……。くそ」

さっきまでの自分に吐き気がする。

アイツが言った様に、俺は、思うとおりに“飛ぼう”。大好きな空へ。

「あれ？」

それにしても、何でアイツ。前の俺を知ってるみたいなこと言ってたんだ？

「……………ま、いいか。とにかく、覚えてろよ篁」

叩かれた左頬を軽く触り——いつの間にか、俺の顔には笑みが浮かんでいた。この一発で、ようやく分かった。

ああ、“コレ”はそういうコトだったんだ……。今、分かった。

俺は、篁美星が————

「うし、気合は十分。練習再開！」

寮頬を叩き、気合を入れる。

さあ、楽しい勝負に向けて、思いつきり跳ぶ為に調整はしっかりしよう。考えるのは、それからだ……。

勝負当日。曜日は日曜日。

勝負内容は、走り幅跳び。

選手は、俺と高城。

立ち合いには、何故か陸上部顧問が出張ってきた。

「先生。何であんたが？」

「ん？ なーに、お前が跳ぶのをまた見れるんなら、これくらいいいくらでもやってやる。まあつまりは、お前は気にすんな」

がははと、豪快に笑い。いかにも体育教師然とした顧問は、記録係りの所に向かって行った。

あの人も相変わらずだな。

さて、それじゃあ、勝負と行きますか——高城！

「……先跳ぶか？」

「そうだな、お前が先行けよ。俺が背中から打ち抜いてやる」

「はっ。そうかよ」

高城とそれだけ言葉を交わし、お互い反対側に分かれる。

先に跳ぶのは高城。後攻が俺だ。

今回は、後腐れなしの一発勝負。二度目はない。

だけど、それで構わない。そっちの方が“面白い”しな。

「……………」

体を解しながら、周りに目を向けていく。

日曜日の為、ここにいるのは当たり前ながら陸上部の男女。その女子の観客の中に、埋めれるようにあの小さな姿を見つけた。

その姿を見て、笑みが浮かぶ。

後で覚えてろよ……。

この間叩かれた頬の借り、絶対に返してやる。

「そんじゃあ、高城。いいぞ」

「はい」

その間に、高城の試技が始まるみたいだ。

本来、三度ある試技を、顧問はただ「そっちの方が燃える」という理由だけで一回にしたらしい。

……俺としては、少し残念だ。跳ぶ回数が減っちゃう……。

「うし……」

感覚が前のものに戻っているのが分かる。

気負いはなく、楽しむ心だけが胸にある。高城の試技を見はするが、今の俺なら、たぶん心を乱すことなんてないだろう。

「おお……」

それどころか、周りが驚愕している中、普通に感嘆していた。

記録は、7m59?。

一発にしては、かなりいい記録だ。

凄いな……。純粹に、そう思った。

心に余裕と言うか、楽しめる空白がある。いつもの、前の俺の感覚だ。

他のことに頓着せず、ただ自分が跳ぶ楽しみを追い求める……。それが、俺の走り幅跳びだ。

「次、新庄！」

「はい」

顧問に呼ばれ、スタート位置へ。

俺が一番飛距離を出せる位置へ着き、右足首を回し軽く跳躍。調子は万全。

往こう……俺のソラへ。

「いいぞ。行ってこい」

「……………」

顧問の声に軽く手を挙げて応える。

一度きりの跳躍。

この一度を、俺は最高のものに仕上げよう。最高に気持ちいい、最高の高さを持って“飛”ぶんだ。

「ふっ……………」

短く息を吐き、走り出す。

俺が跳ぶための滑走路を全力で走る。

見えるのは、ただ広がった青い空。そこが、俺の行くべき場所だ。

「……………っ！」

歩幅を調節し、全力で踏み切る。

宙へと身を投げ、体を上へ。

今までの最高到達点よりも、更に上へ……。

俺が目指す物は、ただ高い場所だ。だから、尚上へ。

滞空は一瞬、着地はしっかりと両足で。

前へも後ろへも倒れることなく、そのまま無理矢理立ち上がり、周りを見回す。

「え、あれ？」

何故か皆驚いているようだった。一体どうしたんだ？

砂場から出て首を傾げてしまう。なんだ……俺の跳び方がそんなに変わったのか？

物凄く疑問に思っていると、顧問の声が聞えた。

「おい。早く測れ！」

「は、はい！」

顧問に怒鳴られた計測係りをしていた一年が、我に返ったように直ぐに動き出した。

なんだ……。やっぱり変だったのか？

ま、どうでもいいや。

とりあえず記録聞いて、フォームの調整をしないと……。あとは……あ、そうだ。勝負だ、勝負。

「記録。どんなでしたか？」

記録を測り終わったようだから、俺は記録を聞いている顧問に聞きに行く。

「ああ。お前の記録は、7m62?だ」

「おー……」

俺の口から出て来たのは、それだけだった。他に言うことも無く、ただ“そんだけ跳んだ”といった感じた。

それにしても、やっぱり跳ぶのは気持ちが良いな。

「おー、って……。まあ、お前はそう言う奴だったよな」

顧問はそう言って、いつもの様に快活な笑みを浮かべる。

やはり、この人はいいい先生だ。

そんな風に思っていると、高城がこちらに向かって歩いてきた。

その顔は、勝負に負けたにも関わらず、どこか清々しく見える。

「負けた。負けたよ、この野郎」

「ああ、そうだな」

「……篁さんのこと、頼むな」

「？ …………… あ、ああ。そう言えばそんな話だったな」

完全に忘れてた……。

結局、俺が勝った時のことが決まっていなまままだ。これは、篁本人に聞いてみるか。

「もしかしてお前。全く考えてなかったのか？」

「“飛ぶ”ことしか頭になかったからな」

俺の受け答えに、高城は溜め息を吐く。

溜め息吐くところか？ 俺にとっては、それが当たり前なんだがな。

「お前……」

「じゃ、俺は行くからな」

高城が何か言いそうになっていたが、面倒そうなのでさっさと目的の人物へ足を向ける。

女子が固まっている場所の一番前に立って、コチラを見ている小さな篁に近付いていく。

だが、どうもボーツとしているらしい。コイツ……何処見てんだ？ 試しに顔の前で手を振ってみる。

「ぶっ————！！」

顔をぶん殴られた。何でだこのヤロー。

けど、いつもの威力がない。……それでもかなり痛いんだけどな。

「な、何か用かこのヤロー！」

「あるから話しかけてんだろうが、このアホ」

鼻を軽く押さえ、何とか文句をたれるとともに、強く睨みつける。こいつ、ホントにどうかしちゃったか？ ……まあいいや。

「で、お前も見てた通り俺が勝った訳だが……。結局、俺が勝った時のこと知らねえんだけど、どうすりゃいいんだ？」

「お、お前。そりゃあ……」

途中まで言って、何故か篁は言葉に詰まってしまった。訳分からん。

決まっていってみて、いいんだよね……。てか、絶対決めてなかったなこいつの場合。

「なにも決めてねえなら、俺が勝手に決まるぞ」

「え、お、おう」

「……お前、本当に大丈夫か？」

コイツの反応の悪さに、少し心配になってきた。

よく見りゃ顔赤いし、風邪じゃあ……篋に限ってそれはないか。
とりあえず顔を覗き込んでみるが、目潰しを喰らいそうになり即退
避。

「危ねえなテメエ……」

「いいから！ さっさと……言え！」

篋は更に顔を赤くさせ、怒鳴る様にこっちに詰め寄ってくる。
本当に訳分からんが、御望み通りさっさと言うか。

「じゃあ、次の日曜。用事があるからちよっと付き合え」

「……………そう、わかった」

何でだ。無茶苦茶しらけた目で見られてんだけど……篋だけじゃ
なく、周りの女子にまで。

俺がなにかしたか！！？

一週間は意外に早く過ぎ、日曜日の昼。俺は待ち合わせ場所で、
ずっと空を見上げていた。

待ち合わせの30分前に来たから、時間が余っちゃったんだ。俺
は随分と分かり易い人間してんだな……。

「……………よっ！」

「……ああ、来たか」

時間がもうそんなに経ったのかと思ひ携帯を見てみれば、未だに待ち合わせまで20分を残していた。

篁は、時間にルーズな訳ではないが、それでもこんな早い時間に来るような奴でもなかった筈だ。……まあ、早くて悪いことはないんだけどよ。

「で、用事ってなんだよ。大したことじゃなかったらぶっ飛ばすぞ」

それにしても、篁の機嫌が先週の勝負の日から、一週間通して悪い。

まあ、俺の用事には関係ない。

「ぶっ飛ばすのは聞いてからにしてくれ」
「？」

篁が大したことないと思ったなら、“これ”は本当にダメなんだろうから、それで構わない。

腹は決まっている。だから、後は伝えるだけでいい。

「じゃあ早速……。俺はお前が好きだ」
「へー。—————はあ!？」

ああそうだとも。

この訳分からん、自分勝手な暴力女のことか、俺は好きだ。友人としてとかではなく、普通に、女として篁美星が好きだ。

ない頭絞って一日中考えた結果、この想いは本物だと判った。だから、後は篁が俺をどう思っているかだ。

当の篁は、口開けてこっち見て固まってる。けど、今は呆けるなんてさせない。

「篁。戻って来い、そして答えてくれ。お前は、俺をどう思っている？」

「え、おま……。いきなり過ぎんだろっ、なんで開口一番それなんだよ！」

「早く伝えたかったからだ。……答えてくれ、頼む」

不機嫌だったのが嘘のように真っ赤になって狼狽えている篁に、真剣に、もしかしたら跳ぶ時以上に想いを籠めて見続ける。

俺の様子に、篁は少し治まったがまだ赤い顔で、忙しく目をあっちこっちに向けて落ち着きがない。たぶん、今は整理してるんだろうから、篁が口を開くまで待つ。

今の俺なら、いくらでも待てる自信がある。

「……………だよ」

「ん…………？」

数秒後、蚊の鳴く様な声で、篁が口を開いた。

「私だって、お、お前が好きだよ……」

「——————」

限界まで顔を赤くした篁が、目を逸らしながら、そう言ってくれた。

この日は、よく晴れた。綺麗な空が見えた日だった。

「まあ、こんなあっさりだったな」

長谷川家の庭に面した窓辺で、松葉杖を持った長身の青年がそう
めた。

「へー……。それにしても、ミホ姉はホント変わんないな」
「だよねー」

その、新城弾と篁美星の馴れ初めを聞き出していたのが、篁の甥
にあたる長谷川昂と幼馴染の荻山葵だ。

この話を聞き出す切欠となったのは、女子高生らしく“そういつ
た”話題に葵が食い付いたからで……。昔から変わらない美星に、
二人で苦笑している。

「このやろー!」
「ごっ!？」

話をし終わり、横に置いてあるお茶に手を伸ばしかけた青年の背
に、不意に膝が叩き込まれた。

勿論、諸悪の根源は篁美星である。成長しようとも小柄で、それ
に比例した膝のため、面積が狭く恐ろしく高い威力という驚異的な
攻撃が出来る。

「て、めえ……。何してくれやがる」
「それはこっちの台詞だ! お前の話だと、まるで私が暴力女みて
えじゃねえか!」

「事実だろ。ビンタも殴りも、シャイニングウィザードも！」

痛みに悶えながら、青年は松葉杖を使って立ち上がりながら篋に
噛みつき、篋が迎撃する。

そんな光景を見ながら、高校生二人はまた苦笑。

「相変わらず仲いいよね」

「いつもこんな感じだけど、仲良いつて言うのか？」

「毎日喧嘩してるのに別れないって、凄いじゃん。仲良くなきゃ付
き合い続けるなんて無理だよ」

葵の言葉になるほど、昴は心中で頷く。思い出すのは、青年に
問われた友人に関してのこと。

線を引かないといけないと考えていた人は、今ではそんなの関係
ないとはかりに、美星と口喧嘩している。

そして早く結婚して、少なくなったとは言え美星の災害を遠ざけ
て欲しい……なんて考えが浮かんできていた。

「だあ！ 面倒くせえっ。勝負だ！」

「望むとこだ！」

何故かヒートアップし、戦域は舌戦から格闘戦に切り替わりつつ
あった。

それを見て昴は、回数が減るも被害が大きくなった災害に、ため
息を溢していた。

(後書き)

最終的に語りオチ。そして、弾は何故か松葉杖で終了です。

まあ、これには裏設定と言うか……。当初書こうと考えていた設定があります。

込み入ったことはなにもありません。

弾が事故に遭って、走ることでどこか歩くことが殆んど不可能になります。血反吐吐くりハビリで何とか歩けるようになり、元気に美星とケンカしてます。

これから色々書いていくので、皆さん応援の程をしようと思ってくださる方は、よろしくお願いします。
ではでは、失礼します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5463z/>

ロウきゅーぶ？

2011年12月18日17時54分発行